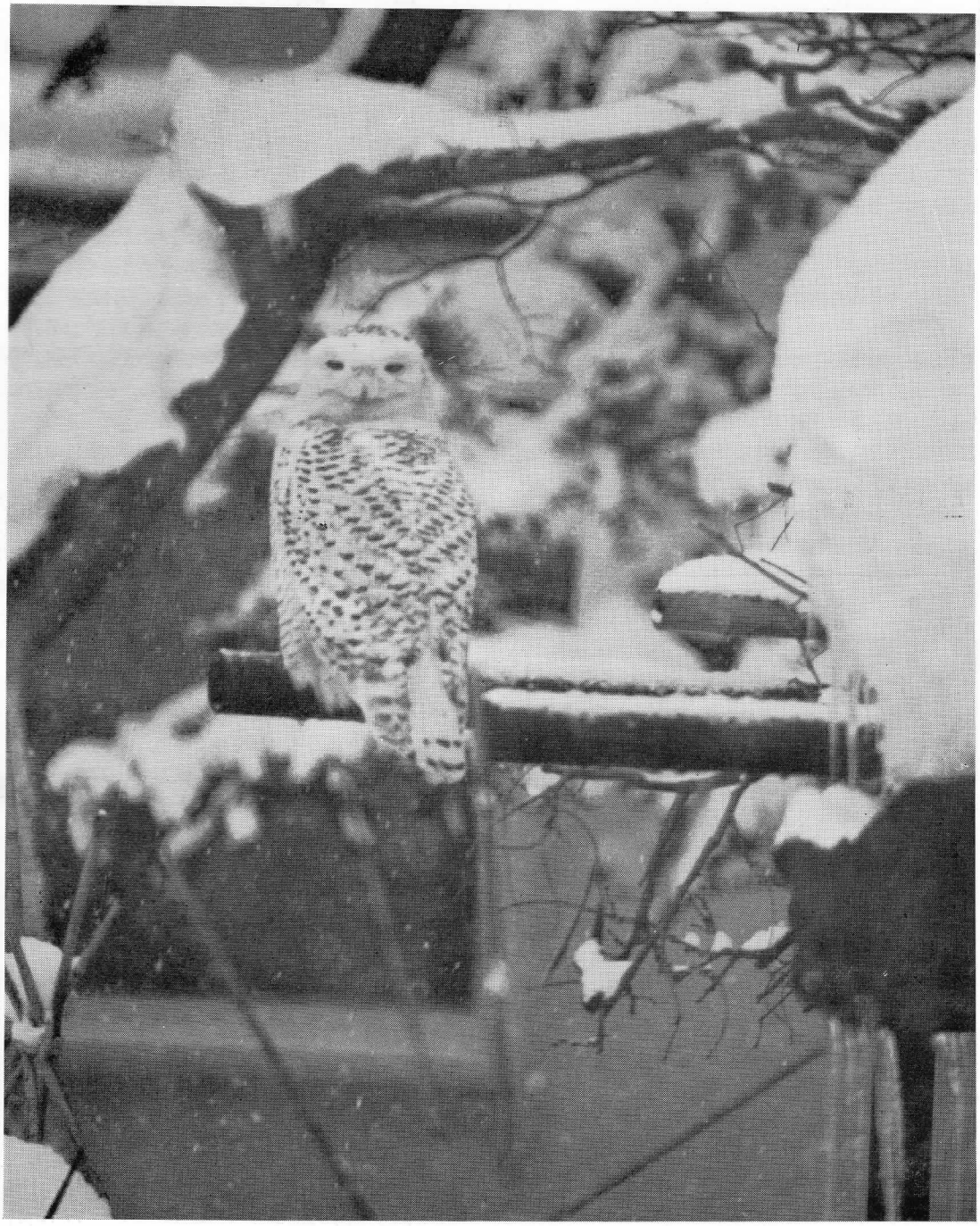
野鳥だより —北海道—

第 26 号
編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和52年2月21日



シロフクロウ　札幌市白石区栄通2丁目で　昭和52年1月14日　撮影 萩　千賀

川湯周辺の鳥

―2年半の記録―

百　武　　充

私は1974年7月から現在まで、道東の弟子屈町川湯に住んでいる。居住期間はまだ2年半にしかならず、特に熱心に観察を続けたわけでもないが、この間の記録を整理したので中間報告として記しておきたい。

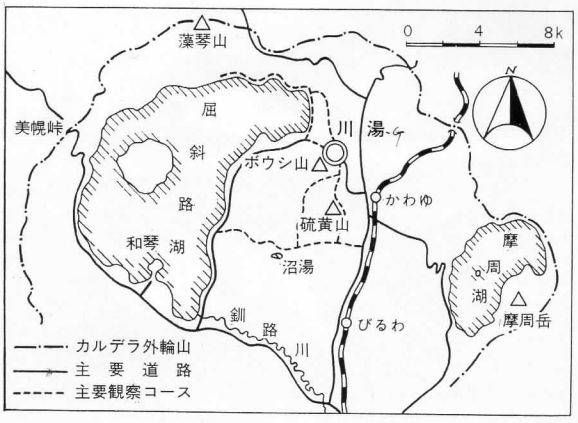
1　期　　間

1974年8月から1977年1月まで、2年6ケ月。

2　観察地域及び記録の方法

弟子屈町川湯を中心として、屈斜路湖、摩周湖を含むいわゆる屈斜路カルデラの内側。ただし、記録のほとんどは、川湯とその周辺の数本の歩道と林道沿いのものである（図1）。記録は土・日曜とか早朝等にこの地域で観察したものの集積であるが、私自身のもののほか、少数の身近な観察者の記録もいくつか含まれている。

（図1）川湯周辺概念図



3　地域の環境

この一帯は阿寒国立公園の区域内であるため、自然環境が比較的よく保存されている。陸域の大部分は森林であり、ミズナラ、ハルニレ、カツラ、トドマツ等から成る針広混交の天然林が最も広く、川湯付近にはアカエゾマツの純林が、カルデラ外輪の上部には一部に針葉樹林がある。また平地の一部はカラマツ等の人工林となっている。硫黄山一帯と藻琴山にはハイマツ帯がある。

屈斜路湖南岸や美留和～川湯付近の平坦地は農耕・採草地として利用されている。また川湯北方の湯川及びアメマス川流域にはアシの生える湿地があったが、土地改良によってほとんど消失した。従って、この地域に残る自然草原は、釧路川沿いにわずかにあるだけになった。

屈斜路湖は湖岸の沼沢や草原の発達が悪く、湖中の小動物も少なく、1～3月はほぼ全面が結氷するために、水鳥の生息場所としてはあまり良くない。また摩周湖には水鳥はほとんど入らないようである。

気温は夏季の30℃から冬季の－30℃まで。積雪は12月中旬から4月中旬までで、その最深は約1mである。

なお、地域の標高は、屈斜路湖の水面が121m、外輪山中最高の藻琴山が999.6mとなっている。

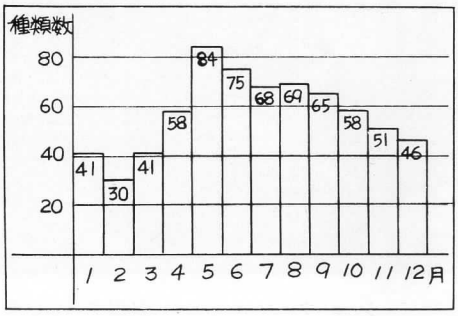
4　鳥相の概要

この期間に記録された鳥は、36科129種である。海のない地域の記録としては、この数字はかなり多いと考えるが、その理由としては、(1)自然環境がよく、森林・原野・湖沼等多くの要素をもっていること。(2)住んでいる場所での観察であるため、観察密度が高いこと、があるといえよう。

種名と出現期間は表1、月別種類数は図2のとおりである。特に珍しい種類は記録されていないが、あえて特徴をあげれば、次のようなことになる。

(1)　ヨタカ、アカモズ、クロツグミ、エゾセンニュ

（図2）月別種類



ウ、メジロ等、本州から道央ではふつうにいる鳥がごく少ないか、あるいはまったく見られないこと。

(2) 標高 200m以下の所にホシガラスがいること。

(3) 夏鳥の渡来が遅く、本誌25号の四十万谷氏の記録と比べ、4月の種類数が相対的に少ないこと。

(4) 草原・湿原性の鳥は概して少ないこと。

(1)〜(3)は、道東の、より寒帯的な環境と、火山地帯である特殊な立地の反映であろう。ただし、エゾセンニュウ等は、釧路地方では少なくないようである。また、(4)は広い原野や草原がないことから当然である。

表1のほか、ノゴマは弟子屈町付近には生息し、川湯でも見た人があるが、ノートに記録していないので省略した。その他、他の文献の記録については5に記すこととし、以下、いくつかの種について簡単にふれたい。

(1) ヒシクイ

1974年と75年に各1回、上空を南下する群を見た。網走の濤沸湖には毎秋100羽ほどのヒシクイがおり、釧路湿原には春秋ともにより多くの群がみられる。川湯はこの両地点の中間にあり、あるいは濤沸湖から山を越えて釧路湿原へ行く小さな渡りのルートがあるのだろうか。

(2) カワアイサ

本種は日本には冬鳥として多数渡来するほか、北海道で数回の繁殖記録がある。屈斜路湖でも繁殖することは永田洋平氏が発表しておられる（文献3）が、私も75年6月に北岸で、ヒナ10羽以上を連れたメスを観察した。

(3) クマゲラ

この地域には、個体数は少ないがまれではない。藻琴山山麓、アメマス川河口付近、川湯スキー場付近、ボウシ山南麓、沼湯付近等では各年とも繰り返し観察でき、川湯では幼鳥2羽を連れたオスを75年7月に観察した。ただし冬季はあまり発声せず、私の行動も限定されるので、記録は少ない。

(4) ハシブトガラとコガラ

この両種を野外で姿によって識別することは、ほとんど不可能である。ハシブトガラはほぼ一年中さえずりを聞けるので、通年生息していることは確実だが、コガラの典型的なさえずりは、川湯周辺では非常に少ない。しかし、特に針葉樹の多い地帯では、私の知っていた両種の典型的さえずりとは違う歌をもつカラがいる。私はこれを一応ハシブトとして記録したので、コガラの記録は非常に少なくなった。しかし、もしこれがコガラであるとすると、繁殖期の両者の個体数はほぼ等しいことになる。表1でコガラに点線が多いのは上記の理由からで、この点の確認が本年最大の課題である。

(5) ヤマガラ

ヤマガラは道東では少なく、釧路湿原ではまれな留鳥

〔表1〕川湯周辺鳥類リスト及び出現期間

(1) 科名及び種名とそれらの配列は文献1に従った。
(2) 出現期間は各月を上旬・中旬・下旬に3分して示した。ただし留鳥については月単位で記した。
(3) 出現期間中、実線は記録できたもの、点線は記録できなかったが生息が確実と思われるものを示す。
(4) 観察期間中の記録が3回以下の種については、出現時期を○で記した。
(5) 渡来状況には、年によって大きな差のある種があるが、この表では年変動は一切無視した。
(6) カヤクグリのように、限られた場所にしか生息しない種については、繁殖が予想されるものであっても、記録回数が極端に少ないことがある。
(7) 備考欄中、たとえば「77年冬」とあるのは、1976年から1977年にかけての冬の意である。

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
カイツブリ	カイツブリ				○	○				○				釧路川
	アカエリカイツブリ							○						
サギ	アマサギ					—								75年に1羽が滞在
	アオサギ				○			○		○				
ガンカモ	ヒシクイ									○○				上空通過
	オオハクチョウ	—	—	—	—	—					—	—	—	
	オシドリ				—	—	—							
	マガモ	—		—	—	—	—				—	—	—	
	カルガモ					○								
	コガモ			—	—	—	—							
	ヨシガモ			○										
	オカヨシガモ					○								
	オナガガモ				○									
	キンクロハジロ					—	—	—	—	—		—		夏季の記録は沼湯のみ
	スズガモ			—	···	—					—	—		
	ホオジロガモ	—	—	—	—	—						—	—	
	カワアイサ			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ワシタカ	トビ	—		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12・1月は非常に少ない
	オジロワシ			○								○	○	上空通過
	オオワシ				○									上空通過
	オオタカ				○				○			○		
	ハイタカ	—		···	—	···	···	—	···	···	—		—	
	ノスリ				—	—	—	—	—	—	—			
	クマタカ		○									○		

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ハヤブサ	チゴハヤブサ									○	○			
	チョウゲンボウ											○		
ライチョウ	エゾライチョウ	—	·····	·····	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
キジ	ウズラ							○						
シギ	タカブシギ										○			
	キアシシギ							—		—	—			
	イソシギ					—	—	—	—	—				
	チュウシャクシギ									○				
	ヤマシギ				—	—	—	—	—	·····	—			
	オオジシギ				—	—	—	—	—	—				
ヒレアシシギ	アカエリヒレアシシギ									○				
カモメ	ユリカモメ					—					—	—		
	アジサシ									—				
ハト	キジバト				—	—	—	—	—	—	—	—		
	アオバト						—	—	—	—				
ホトトギス	ジュウイチ						○○							2例のみ
	カッコウ					—	—	—						
	ツツドリ					—	—	—	—	—				
フクロウ	アオバズク						—	·····	·····	—				各年1個体のみ
	フクロウ	·····	·····	—	—	—	—	·····	·····	·····	·····	·····	·····	
ヨタカ	ヨタカ						—	—	—	—				各年1個体のみ
アマツバメ	ハリオアマツバメ					—	—	—	—	—				
	アマツバメ					—	—	—	—	—	—			
カワセミ	ヤマセミ			○		○								釧路川にはいるらしい。留鳥？
	カワセミ								○					
キツツキ	アリスイ					—	—	—						
	ヤマゲラ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	クマゲラ	—	·····	—	·····	—	—	—	—	—	—	—	—	
	アカゲラ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	オオアカゲラ	—	—	—	—	—	—	—	—	·····	—	—	—	
	コアカゲラ		○	○					○					8月は若鳥2羽。留鳥？
	コゲラ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ヒバリ	ヒバリ				—	—	—	—	—	—	—			
ツバメ	ショウドウツバメ						○	○						釧路川筋にはいるらしい
	ツバメ					○○								
	イワツバメ				—	—	—	—	—	—				
セキレイ	キセキレイ					—···	·····	—						非常に少ない
	ハクセキレイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	セグロセキレイ	—		—	—				—		—	—	—	少数個体が不規則に出現
	ビンズイ					—	—	—	—	—	—			
	タヒバリ				——					—···	——			
ヒヨドリ	ヒヨドリ	—	—	—	—	—				—	—	—	—	
モズ	モズ				—	—	—	—	—	—	—			少ない
レンジャク	キレンジャク			—	—							—	···—	
カワガラス	カワガラス		○											
ミソサザイ	ミソサザイ	—	—	—	—	—	·····	·····	—	·····	·····	—	—	
イワヒバリ	カヤクグリ						···○···	·····	···○					藻琴山での記録のみ

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ヒタキ	コマドリ													6・8月は藻琴山での記録
	コルリ													
	ルリビタキ													
	ノビタキ													
	マミジロ						○○							
	トラツグミ													1月は1例のみ
	クロツグミ					○								1例のみ
	アカハラ													
	シロハラ											○		
	マミチャジナイ													
	ツグミ													77年冬は越冬個体が多い
	ヤブサメ													
	ウグイス													
	シマセンニュウ							○						アメマス川干拓地で1例のみ
	マキノセンニュウ							○						
	コヨシキリ									○○				
	メボソムシクイ													
	エゾムシクイ													
	センダイムシクイ													
	キクイタダキ													
	キビタキ													
	オオルリ													
	サメビタキ													
	コサメビタキ													
エナガ	エナガ													
シジュウカラ	ハシブトガラ													
	コガラ													本文参照
	ヒガラ													
	ヤマガラ													8月は若鳥1羽
	シジュウカラ													
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													
キバシリ	キバシリ													
ホオジロ	ホオジロ													
	ホオアカ													少ない
	カシラダカ													
	シマアオジ													少ない
	アオジ													
	クロジ													6・8月は藻琴山での記録
	ユキホオジロ												○	
アトリ	アトリ													
	カワラヒワ													
	マヒワ													
	ベニヒワ													76年冬は多い。他の年はまれ
	オオマシコ	○											○	
	ギンザンマシコ													77年冬は多い。他の年はまれ
	イスカ	○										○	○	
	ベニマシコ													冬季はまれ
	ウソ													
	イカル													冬の記録は77年冬のみ
	シメ													冬季は少ない
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ													
	スズメ													
ムクドリ	コムクドリ													
	ムクドリ													12月は1例のみ
カラス	カケス													
	ホシガラス													夏季は藻琴山のみ
	ハシボソガラス													川湯にねぐらがある
	ハシブトガラス													川湯にねぐらがある

（橋本正雄氏、文献４）、根室半島では観察されない（高田勝氏他、文献５）。しかし、硫黄山山麓では毎年秋にはヤマガラがいて、ハイマツの種子を食べている。また、川湯では、75、76年と２冬続けて２羽が越冬し、今年も２月になってから１羽が出現した。夏季はほとんど見られず、76年８月に１回観察されているだけである。

(6)　ホシガラス

藻琴山には夏季生息し、75年６月にはなにかをくわえて同じ方向に飛ぶのを反復観察しているので、おそらく繁殖していると思われる。硫黄山周辺のハイマツ帯には秋～冬にはかなり多いが、私は夏には見ていない。９～10月には川湯上空を高く飛ぶ本種を何回か観察したことがあり、季節移動を行っているのではなかろうか。

5　その他

弟子屈町には永田洋平氏がおられ、この地域の鳥に関して長年蓄積された膨大なデータをお持ちのはずである。文献２にある氏の硫黄山周辺の鳥のリストのうち、私がまだ記録できないものは、オオモズ、ヒレンジャク、ハギマシコ、エゾビタキ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、オオコノハズク、コノハズク、ツミ、アカショウビンの10種、文献３では摩周湖のミサゴがある。また氏のお話によると、藻琴山麓にはかつてシマフクロウが住んでいたという。

藻琴山からは1961年にマダラウミスズメの営巣の記録があり（文献１）、また、1974年３月には川湯でシロハヤブサが観察されている（文献６）。

以上、ごく簡単に川湯周辺の鳥の概要を書いた。期間も短く、方法もずさんであるため、多くの見落としや見誤りもあろうが、今後補正してゆきたい。今年の目標としては、(1)　コガラとハシブトガラをはっきり区別すること。(2)　いままでも行ってきたラインセンサスの精度を高めること。(3)　出現頻度による個体数の相対的な比較を試みること、の３点を考えている。

6　主な参考文献

(1)　日本鳥類目録　改訂第５版　日本鳥学会編　1974
(2)　川湯硫黄山とその周辺の自然環境調査報告書　弟子屈町教育委員会　1975
(3)　摩周湖及屈斜路湖自然環境調査報告書　同上　1974
(4)　釧路湿原総合調査報告書　釧路市郷土博物館　1975
(5)　根室自然保護教育研究会49年集録　1975
(6)　野鳥第340号（昭和50年１月号）日本野鳥の会1975

（川上郡弟子屈町川湯　阿寒国立公園管理事務所）

オロロン鳥

佐々木　勇

明治37、８年の日露戦争で、日本が樺太を領有してからのことである。

太平洋岸にオロロン鳥の大群が繁殖する島があった。ここはオットセイの大繁殖地なので、その期間中は、樺太庁から監視員として数名の役人が、この無人島に派遣されたのである。

天　売　島・赤　岩　　撮影　萩　千賀

島ではオロロン鳥の卵を塩漬にして食糧に貯蔵することが、毎年の慣例として行われていた。まず岩の上の無数の卵を、一度、全部竹箒で掃いて、一つ残らず海中に落として捨ててしまうのである。やがて卵が次から次と生み落とされていくので、この生みたての新鮮なものが集められて樽漬にされるのである。この島のオロロン鳥は誠に運の悪い鳥たちなのである。

天売島の赤岩のオロロン鳥は、早くから珍しい鳥の繁殖場として島の人々の話題になっていた。この鳥はオロロンと鳴くのでその鳴き声からオロロン鳥と呼ばれていたのである。

むかし先住民族のコロポックルの娘がこの島に住んでいた。旅に出て必ず帰って来るはずの恋人がいつまで待っても帰って来ないので、毎日岩の上で恋人を待ち続け恋焦がれて遂に死んでしまったのである。

この娘がオロロン鳥になって、恋人が旅立った春が来るとオロロン、オロロンと鳴くのだという伝説があった。

時の佐上北海道長官が天売島を視察した際、島の人々に世話になった御礼に何かお返しをしたいということになった。それで町ではオロロン鳥を天然記念物に指定してほしいと申し出たのである。

ところが委員の北大動物学教室の犬飼教授は、オロロン鳥としては指定は出来ない、和名のウミガラスでなければならないということになってしまったのである。

天売島の人々は、オロロン鳥という名はこの鳥の唯一の名であると信じ切っており、他に呼び方があろうとは夢にも思っていなかったから、せっかくの海鳥繁殖地の指定も今後はオロロン鳥が無くなって「カラス」では名前が悪いというのでガッカリしてしまったのである。

村役場では天然記念物になる前に一通り島の鳥を標本にして保存したいというので、採集された中にはオロロン鳥等の外にエトピリカが1羽含まれていた。

オロロン鳥は、卵を唯1個しか生まない。その代わり卵の大きさは鳥に比して大型で、形も少し変わっていて一端が太く大きく他の一端は細く尖っているのである。

この形態は岩の上で卵が移動した場合、細く尖った一端を中心軸として同じ位置でグルグル回転し、その場所以外には転がっていかぬようになっているためだという。

例えば、ややゆるい斜面地の岩でも親鳥の留守中風が吹きつけたり、または鳥同士が争ったりして卵が転がされても海には落ちていかないのだともいう。

岩の上で抱卵されるので容易に傷んだり割れたりしないように、卵の殻は、とても厚くて硬く丈夫に出来ている上に色や模様も美しいのである。

この特異な形質が、物好きな人間にははなはだ重宝されて、卵を上下に切断し金属で細工をして台を作り、切口の縁にも金や銀で細工をして実に立派な盃を作り、自慢し珍重することが流行したことがあるのである。

そのため不心得者が命がけで赤岩に登って卵を盗み出すという悪い習慣が昔は長い間あったのである。

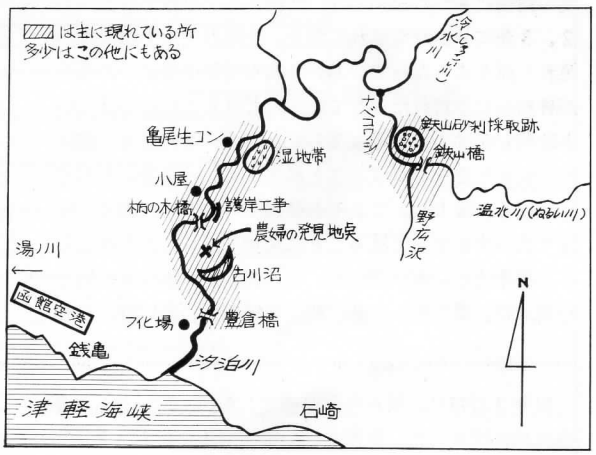
しかし、現在は天然記念物として手厚く保護され幸福そうである。ウミガラスという名称にこそ変わったが、島では大切な観光資源というおまけも付いて、この島のオロロン鳥に限っては誠に運が良かったということになったのである。

（小樽市花園1丁目11の2）

コウノトリ
函館に現るの記

51.12 2 古川沼で
撮影 吉沢

隅田重義*
吉沢貞一**



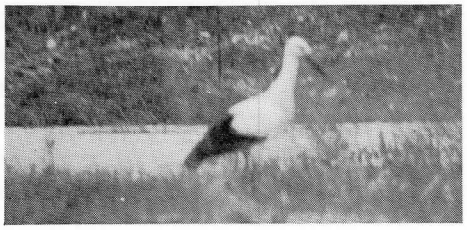
野生ではもはや絶滅して、日本には居ないことになっているコウノトリが、突然函館市の郊外汐泊川流域に現れた。唯1羽で、どこから来たのか、雄なのか雌なのかも全くわからない。分布図を見ると旧満洲と北朝鮮、東シベリアのアムール河吐き口付近が生息地になっているようだが、そこから一気に飛来したものか、途中転々として来たものかも全く不明である。風聞によれば一昨年は2羽、昨年は7羽本州に現れたとか。何羽が実数であるのか詳しい資料がないので一切が不明である。

さて、当地にはいつから現れたのかについて事後調査をいろいろしてみた結果は次の様である。流域の石倉町の畑地で何度となく見ている農婦の話を総合すると、どうも10月20日のようである。近くに古沼がありよくここに来ていたとのことだった。又その頃下流の孵化場の作業員や郵便配達人も見ている。栃の木橋上流 100メートル位の所で11月2日から護岸工事が始まった。この日、5人の作業員が畑地に居たコウノトリを見ている。彼等はツルを見たといっていた。10月20日以前の話は調査に現れていない。

私どもは11月19日に初めてその通報を受けて驚きあわてたのである。以後荒天や所用の日を除いて毎日生息調査に出かけてはいるが、どこに隠れているのか一日中捜しても全く見つからない日の方が多かった。27日昼のこと、亀尾町生コン裏の川原で近くを飛ぶ優雅端麗な姿のコウノトリに接することが出来た。しかし、初対面は長くは続かなかった。次第に川向かいの湿地帯の方向にゆっくりゆっくり消えて行ってしまった。その後ようやく茅原の沼辺にその姿を再発見したが、葦陰から落ち着い

て見る暇もなく飛ばれてしまった。写真は逆光で撮れなかった。飛び立った跡に行って調べたところ、巻貝や小魚が居た。こんなのが餌になっているのかも知れない。

農婦が見始めた頃は車が近付いても翼を広げて、4、5間もわきによって車を見ていたということである。また、



51・11・28 砂利取沼 撮影 吉沢

少し長い棒でもあれば叩くによいような近い所で睨めっこも出来たという。それが今では警戒心が強くなり50メートル近付くのさえ大変な仕事になってしまった。

28日は寒気の強い朝で溜り水は皆厚く凍っていた。下流域にはどこを捜しても鳥の姿はなかった。もしや、砂利取沼あたりではということになり、8キロ上流の鉄山町に出かけることになった。ここは4,500メートルの土堤の内側に4つの沼があり、外側は広い川原で汐泊川が2、3条に分かれて流れており、土堤のすぐ下は湧水の流れと溜り水となっている。もちろん葦や蒲が一杯あるが皆枯れたり折れたりしている。どうもこの辺が怪しいと時間をかけてこっそり捜したところ、この溜りに遂にあの大きな姿を発見することが出来た。一度飛んだがすぐ又近くに降りた。ここぞと砂利山の陰から500ミリ望遠で立つ姿をやっと撮ることに成功した。しかし残念ながら出来はピンボケだった。その後、鉄山橋付近で近くを飛ぶ姿、翼の黒い部分、純白の尾羽根、赤い脚、目の回りの赤い線、嘴の灰黒色、首胴脚等長いがよくバランスのとれた姿など、思わざる所で観察上の大収穫を得ることができた。ここでも又、引き返して溜り水を調べてみたら、4、5センチのウグイの子が何百と泳いでいた。泥の中には大型の足跡が沢山付いてる。ここも餌場の一つではなかったろうか。この鳥はどんな所で夜を過ごすのだろうか。タンチョウは川の中に立って、外敵を防ぎながら眠ると聞いている。この鳥もやはり同じような状態で過ごすのだろうか？　夕方、暗くなってから見た人の話では川の中州にいたというし、早朝、川べりで見たという人もある。夜の観察はなかなかめんどうである。

12月8日、もう求めようとしても求めることが出来ないこの鳥の姿を8ミリに残しておこうということになり、隅田先輩がこれを担当することになった。この日は天候にも鳥の出会いにも全く恵まれて、遠くも近くも実に良く撮ることが出来た。仕上がりも上々だった。私は生コン裏で沼端に立つ姿を撮ろうと物陰から近付いたが、無数のカラスの群に邪魔されて失敗してしまった。5、6羽のカラスが執拗に攻撃して下流に追いやってしまったのである。

この鳥は寒さに強いとされているが、いつまで居坐るつもりだろうか。餌場が次々と凍ったらどうなるだろうか。保護といっても側面から人為的な悪行に注意を与える位のもので、これという積極的なことは何一つ出来ない。真に残念な話である。12月19日にも吹雪の中に確認されているので通算61日滞留ということになる。その後はなお継続観察中である。

（文責・吉　沢）

*（鳥獣保護員　函館市八幡町13—16）
**（鳥獣保護員　函館市万代町7—24）

冬を越すモズ

柳沢信雄

51年2月15日、朝から雪模様でしたが、思いきって探鳥に出かけました。野幌森林公園大沢入口からスキーで林内に入りました。

この日は、キバシリ、エナガ、ヤマガラなど、いつもより数も多く、ゆっくり観察が出来て満たされた気持ちで帰途につきました。

入口近くまでひきかえしてきて、また、カラたちの群にあいました。

群の中にモズらしい姿をみつけ、ハッとしました。もしや、オオモズではないかと胸をドキドキさせながら、双眼鏡で確かめました。しかし、オオモズではなく、モズのオスです。小さなネズミをくわえていました。赤みのこい、元気な姿です。カラたちの移動について、林内に消えて行きました。

この深い雪の中から、どのようにしてネズミをみつけたのでしょう。

（札幌市白石区栄通8—86）

鳥の食物を調べよう

藤巻裕蔵

野鳥の観察をしている私たちは、それぞれ自分のノートをもち観察記録を残しています。どんな鳥がいつ、どこで見られたかという記録がだんだん蓄積されるようになってきました。「野鳥だより」に各地の鳥類リストが掲載されるようになったのも、その結果でしょう。ところが、これらの鳥が何を食べているかについてはよくわかっていません。採餌行動は、普通の野鳥観察では見すごされているか、観察されてもノートに記録されていないのかもしれません。食べることは動物の生活の中でも重要なことですが、残念ながら現在北海道に生息する鳥類の食物について十分な資料はありません。

鳥の食物を調べる方法にはいくつかありますが、私たちにできるのは、採餌している鳥を観察して何を食べているか確かめる方法です。一般にこの方法では、餌となるものの名前がはっきりしない場合が多いのですが、植物の種子や果実を食べている場合には、採餌している植物ははっきりわかります。

そこでどのような鳥がどのような植物の種子や果実を食べるかという資料を集めてみようと思います。夏の間おもに昆虫を食べているような鳥でも秋から冬にかけては種子をよく食べるようになりますし、予想もしなかったような興味ある観察結果が得られるかもしれません。

皆さんの観察記録を次の要領で下記にお送り下さい。例をあげておきます。

鳥の名前	餌の種類	年月日	場　　所
カケス	コクワ果実	49.10.15	苫小牧北大演習林
ハシブトガラ	カラマツ種子	49.11. 1	美唄市光珠内
アオジ	ヨモギ種子	50.10.15	帯広市稲田
オオマシコ	ヤマハギ種子	52. 1.15	新得町新得山

送り先：080 帯広市稲田町、帯広畜産大学　藤巻裕蔵

締切日はありませんので、いつでも記録をお送り下さい。ある程度集まりましたら、「野鳥だより」誌上にまとめた結果を報告します。このような資料は、鳥の生活を明らかにするのに役立つばかりでなく、公園や林地にどのような植物を植えたらよいかを知るのにも役立つでしょう。

■編集部から■　今号から「鳥民便り」コーナーを設けました。会員同士の照会、依頼等にご利用下さい。

鳥民便り

◆訃報　宮脇恒氏　昭和51年10月27日病気のため逝去されました。享年76歳。氏は、北海道国土緑化推進委員会理事長、知事の諮問機関である道自然保護審議会会長、道自然環境保全審議会委員等を務められ、昭和45年北海道野鳥愛護会の設立と同時に副会長に就任されました。謹しんでご冥福をお祈り致します。

◆事務局の電話が変わりました　本会の事務局となっている道自然保護課鳥獣保護係の内線番号が変わりました。新しい番号は、**代表231-4111内線3893**です。

◆51年度分会費納入お願い　今年度の会費は個人600円、団体 1,500円です。未納の方は、納入方よろしくお願い致します。納入方法はできるだけ郵便振替（口座番号＝小樽 18287番、北海道野鳥愛護会）をご利用下さい。この場合、通信欄を利用してはっきりと年度を記入して下さい。なお、決算の都合もありますので今年度中（3月末まで）に納入下さい。納入状況について不明の時は事務局へご連絡下さい。

◆昭和52年度総会　を次のように開催致します。多数の出席をお願い致します。

と　き　昭和52年4月9日（土）午後2時～5時
ところ　札幌市中央区北4条西5丁目
　　北海道林業会館3階A会議室
議　題　1　昭和51年度事業報告及び会計報告
　　2　昭和52年度予算案及び事業計画案
　　3　役員選出
　　4　その他

◆キツツキの参考書を　森林保護のためどのような役割をしているかについて記述したもので、短く触れたものでも結構ですので、知っておられる方はご一報下さい。　〒061-21　札幌市南区真駒内緑町五輪団地7—102　馬場錬成（電 011—582—2177）

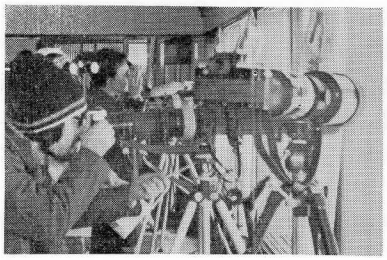
◆フクロウの確認状況記録を　お寄せ下さい。新年懇談会の際、今年から一年毎に重点的に情報を交換し合う鳥を決めようということになり、今年度はフクロウ科の鳥を選びました。最近確認された状況をお知らせ下さい。全道的に網羅されれば貴重な資料となります。まとまり次第誌上で報告したいと思います。

◆冬鳥の初認記録を　お寄せ下さい。夏鳥の初認とともに、冬鳥の初認記録をとることに致しました。今冬は例年と状況がかなり違っているようですので、興味ある結果が得られると思います。

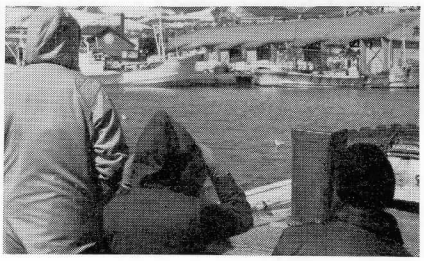
新年懇談会

年頭恒例の懇談会が1月29日行われました。NHKの好意で、サロベツ、ベニヤ原生花園を中心とした湿原の鳥のフィルム(日本の自然)が映写されましたが、道庁の映写機が折からの寒波のためか故障し、途中で打ち切らざるをえなかったのは残念でした。急ぎ懇談会に切り替え、今冬の冬鳥の話題を糸口に懇談が始まりました。お気づきのように、今冬はキレンジャクの飛来が少なく、そのためかツグミの群れが目につくようです。ハチジョウツグミもまじっているようです。続いて給餌を中心とした野鳥保護の問題に話が移り、半ば観光化したハクチョウの餌付けに意見が集中しました。〝乞食白鳥〟とまで酷評される彼ら、また水面が凍結すると採餌もできなくなる彼ら。ケースバイケースで考えるべきことでしょうが、本当に野鳥の立場での保護というものが成り立つのかどうか、今後なお真剣に考えねばならない問題でしょう。最後に会員の方々が撮ったトラフズク等のスライド、8ミリを観賞して散会しました。　(文責・森)

〔参加者〕早瀬広司、豊島博男、羽田恭子、柳沢信雄・千代子、野々村菊、菊地実、半沢正九郎、岩泉ゆう子、小野寺敬子、平井さち子、溝部泰子、新妻博、森拓人・やよい、谷口一芳、土屋文男、野口正男、新宮康生・八枝、船造淳一、佐々木勇、岡田幹夫、村野紀雄、萩千賀、狩野広、中島洋子、芦野寿衛吉、井上元則、野村梧郎、山下精二郎、梅木賢俊(順不同)



撮影　谷口一芳



撮影　梅木賢俊

藤の沢探鳥会

小堀煌治

恒例の「藤の沢探鳥会」が1月30日行われました。昨夜来の雪でふっくらと積もった新雪に朝日が当たり、まぶしいほどでした。たちまち窓際に望遠レンズの放列ができましたが、あまりの物々しさに鳥の方で驚いたのか、テレたのか成果はさっぱりでした。小鳥の村の村長さんもやきもきしましたが、常連のハヤブサ、ヤマゲラ、ツグミ等一向に姿を見せません。それでも「藤の沢の鳥の色はきれいだなあ」という声が聞かれ、本物の色をじっくり鑑賞でき、いつもとは違った意味でいい探鳥会になったのではないでしょうか。昼食時には村長さんの奥さんの心づくしの豚汁に舌つづみを打ちながら話に花が咲きました。会員宅の給餌台の様子が楽しく紹介されました。今年はどこも不作で少々がっかりしましたがツグミ、ハチジョウツグミ、マヒワは例年になく多く見られるそうです。又、藤の沢地区で行われたコムクドリの足環付けの話に移り、実行された土屋さん、小沢さん、藤の沢小学校の先生達から細かく報告されました。これは2年前から、小鳥の村を中心に行われたもので、巣箱のヒナに足環を付け、渡りの様子を調べようという計画です。2年間で約100羽のヒナに金色、銀色の足環を付けました。もし、足環を付けたコムクドリを見かけた方は藤の沢小学校にご一報下さいとのことです。その後スライドの映写会が行われ、皆さんの労作が次々に発表されました。なかなかの秀作ぞろいで撮影者の苦労話や名解説を聞きながら観客席から感嘆の声がしきりに上がりました。その後待望のヤマゲラも姿を見せてくれ会は楽しく終わりました。最後に今年の藤の沢地区の鳥の特徴ですが、コウライキジが異常に少ないことが気にかかります。これは日ごろこの地区で鳥を見ている人達が一様に指摘しているところです。昨年までは道端や、庭先まで姿を見せていたのが今年はほとんど見えないのです。そういえば昨年の秋、この地区でハンターの姿を度々見かけました。簾舞の民家に散弾が飛びこんだという話も聞きました。コウライキジが見られないということは藤の沢の人間にとってさびしいことです。

〔日時〕　52年1月30日　10：00～14：00　晴

〔担当幹事〕　小沢広記・平井さち子

〔見られた鳥〕　アカゲラ　ヒヨドリ　カケス　シジュウカラ　ハシブトガラ　ヤマゲラ　キジ(雌2)　ヒガラ　スズメ

〔参加者〕　柳沢信雄・千代子、浦田日出雄、佐竹俊男、羽田恭子、新宮康生、早瀬広司・富、津田新平、梅

木賢俊、菊地実、小堀煌治、谷口一芳・登志、松本宜欣、三国亮、土屋文男、小野寺敬子、萩千賀、岡田幹夫、森拓人・やよい、野口正男、野々村菊、野村梧郎、芦野寿衛吉（順不同）　（札幌市南区藤野278の18）

小樽探鳥会

佐々木　勇

朝10時30分、小樽港第三埠頭から通船の船で海へ出ました。晴天で波もなく楽しい海上探鳥会となりました。防波堤の上にオオセグロカメモの大群集。船が近づくと次々と飛び立ち、船の周りはオオセグロカモメの飛翔で覆われ、実に壮観です。セグロカモメも少数いて、大きな胸、羽で飛んでおりました。もちろんカモメも多数おりました°カモ類では全身真っ黒なクロガモが2、3群50羽くらい、ホオジロガモも約50羽、コオリガモが約30羽、シノリガモもところどころにおり、船が近くまで寄ったので胸の大きな2本の縦線や赤褐色の腹が見え、歓声が上がりました。ケイマフリが1羽船に近づきましたが、船や人には無関心でゆうゆうと泳いでいます。

オオハムらしい大型の鳥が3羽見られましたが、冬羽のため色が判然とせず、背に白い斑点がかすかにあり、シロエリかもしれないということになりました。

1時間半、港内だけでしたがくまなく回り、12時過ぎ陸に上がって実り多い探鳥会を終えました。

〔日時〕　51年12月12日　10：30～12：00　晴

〔担当幹事〕　佐々木勇・梅木賢俊

〔見られた鳥〕　ウミネコ　オオセグロカモメ　セグロカモメ　クロガモ　ホオジロガモ　コオリガモ　シノリガモ　ケイマフリ　オオハム　ヒメウ　ウミスズメ　マダラウミスズメ　ウミアイサ　ウミウ　ミツユビカモメ　ユリカモメ　カモメ　ハシボソガラス　スズメ

計9種類

〔参加者〕　羽田恭子、溝部泰子、平井さち子、柳沢信雄・千代子、芦野寿衛吉、新宮康生、松山佳則、津田新平、中野高明、渡辺俊夫、富樫敏雄、亀尾紋十郎、早川昇、竹内喜代治、津田静子、松木光治（順不同）

●表紙のことば●

シロフクロウ

野村梧郎

札幌市役所の木内さんから白石区の宇野さんの家にシロフクロウが来ているとの連絡をもらいました。なんとなく気ぜわしい日だったため、石狩支庁の武田さんと道自然保護課の萩さんが先行し、私は後から行きました。

宇野さんのお宅では目の色を変えて押しかけた私たちを親切に迎えて下さいました。宇野さんのお宅の居間から広い庭が見渡せます。その庭のほぼ中央、藤棚と思われる丸太の上にまぎれもないシロフクロウが1羽止まっていました。庭はすっぽりと雪に埋まり、簡単には近寄れそうにはありません。

人間が近寄れないということは、犬や猫も近寄れないということになり、この鳥は良い場所を休憩所に選んだことになるのでしょうが、餌を探して夜明けまで飛び回り、気づいた時にはどこにも行きようがなくなり、やむを得ず止まったのがこの場所だったのかも知れません。

フクロウの仲間は夜行性なので日中は活動しないのが普通ですが、シロフクロウの故郷の北極圏の夏に夜はないので、シロフクロウは日中も活動できなければ生きていけないことになります。でも目の前のシロフクロウは活発には動きません。となるとやはり昼は苦手なのかと余り科学的でないことを自問自答しながら眺めていました。

今冬はシロフクロウの情報が多くありました。宗谷と胆振支庁管内で1羽ずつ保護され、それぞれ札幌と旭川の動物園に収容されており、網走支庁管内でも記録があり札幌でもこの1羽。この冬、シロフクロウが近年に例のない数で北海道に渡って来たことになります。そのうえ青森県でも保護されたものがいるということです。

この現象を今冬の厳しい寒さと直結させるのは余りにことを簡単に考え過ぎることになるでしょうが、今年はレンジャクなど冬鳥の渡来が極端に少なく、シロフクロウのように珍しい鳥が姿を見せているのは、年によって野生の世界が変わる証拠のひとつでしょう。

（札幌市西区手稲西野374）

小樽探鳥会寸描

平井さち子

小樽寂び横顔白くすぎゆく鴨

鴨どちに舳先鋭く泊つソ連船

海雀潜りぬ瞬きまたたき待つ

冷たさの赤き脚翔つ北の鷗

浮寝鳥覚まさず通る通過駅

夏鳥の初認

整理・小川　巌

◆旭川とその周辺　山田良三

3．23 **ハクセキレイ**（嵐山）、3．31 **キジバト・アリスイ**（神楽岡）、4．1 **ヒバリ**（新富町）、4．6 **ホオジロ・カワラヒワ・アオサギ**（永山）、4．11 **オオジシギ**（春光台）、4．13 **モズ**（神居）、4．18 **アオジ**（神楽岡）、4．19 **イソシギ**（近文）、4．20 **イワツバメ**（上川郡愛別町）、4．28 **コチドリ・オオジュリン**（花咲）、4．30 **ウグイス**（春光台）・**アカハラ**（神楽岡）、5．1 **ノビタキ・ルリビタキ**（上川郡鷹栖町）、5．2 **クロツグミ**（嵐山）、5．4 **ベニマシコ・ホオアカ・カルガモ・ヤマシギ**（鷹栖町）・**コムクドリ**（嵐山）、5 6 **アカモズ**（嵐山）、5．9 **キビタキ**（鷹栖町）、5．10 **カワセミ・イカル**（富沢）、5．12 **コノハズク**（嵐山）、5．13 **センダイムシクイ**（神楽岡）、5．14 **オオヨシキリ**（春光台）、5．16 **チゴハヤブサ・ビンズイ**（見本林）、5．18 **カッコウ**（嵐山）、5．20 **シマアオジ**（永山）5．23 **ノゴマ**（春光台）、5．27 **エゾセンニュウ**（春光台）。

以上のうちキジバト、アオジ、ウグイス、センダイムシクイ、チゴハヤブサ、アカハラの6種については柴田直巨氏、アリスイは斎藤博氏、オオヨシキリは川島順次氏による初認記録である。

◆帯広とその周辺　藤巻裕蔵

4．3 **ヒバリ**、4．17 **アオジ・ベニマシコ**、4．20 **クロツグミ**、4．24 **オオジシギ** 4．25 **ニュウナイスズメ**（緑ケ丘公園）、4．26 **ウズラ・ビンズイ**、4．27 **ウグイス・ヤブサメ**（新得町新得山）、5．1 **コルリ**、5．2 **ヤマシギ**、5．6 **アカハラ・アリスイ・エゾムシクイ・オオルリ・センダイムシクイ**、5．9 **ツツドリ**、5．11 **シマアオジ・ノゴマ**、5．15 **コムクドリ**、5．16 **キビタキ**（緑ケ丘）、5 18 **カッコウ**、6．1 **マキノセンニュウ**、6．3 **コヨシキリ・エゾセンニュウ**。

特別の記載のないものはすべて帯広市稲田町。またオオジシギとカッコウの記録は戸田敦夫氏によるもの。

◆野幌森林公園　柳沢千代子

4．7 **カワラヒワ・モズ・キジバト**、4．10 **ホオジロ**、4．13 **トラツグミ**、4．18 **ノビタキ・アオジ・ベニマシコ・カイツブリ**、4．20 **ウグイス・クロツグミ**、4．25 **ニュウナイスズメ・イカル**、4．27 **アカハラ・メジロ・ルリビタキ・センダイムシクイ**、5．2 **ホオアカ**、5．9 **ツツドリ・アリスイ・コムクドリ**、5．11 **バン・コサメビタキ・アカショウビン**、5．13 **キビタキ**。

野幌森林公園以外の記録として、3．28 オオジュリン・アオサギ・ハクセキレイ（ウトナイ湖）、4．2 ヒバリ・オオジシギ（浦河町）がある。

◆糠平とその周辺　川辺百樹

3．30 **ハクセキレイ**、4．7 **キセキレイ**、4．13 **モズ**、4．15 **キジバト**、4．20 **ノビタキ**、4．21 **イワツバメ**、4．25 **ヤマシギ**、4．27 **ウグイス**、4．30 **アカハラ**、5．1 **トラツグミ・エゾムシクイ**、5．3 **イソシギ**、5 4 **ルリビタキ**、5．9 **コマドリ**、5．10 **センダイムシクイ**、5．14 **キビタキ**、5．16 **ヤブサメ**（十勝三股）、5．17 **コルリ**、5．19 **カッコウ・ツツドリ**（十勝三股）。

記録地の記載のないものはすべて糠平。（以下次号）

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

☆　今号のトップの原稿、締切の2週間前に百武さんに無理を言ってお願いしました。短期間に立派なものを仕上げていただき感謝致しております。任期中あと1号、ラストスパートというところです。（小川記）

☆　編集委員4人の皆さんのおかげで、何とかヤマを越しました。本当に感謝しています。今年は小樽・張碓のアオバト観察に取り組もうと、今から張り切っています。（梅木記）

☆今年度の会誌発行もこれで3号目。ようやく軌道に乗ってきました。皆様からの意欲的な原稿を一層期待しています。また批判、要望など会員の生の声を聞きたい気もします。会の運営についての提言もありましたら、併せて聞きたい気がします。（馬場記）

☆　エトピリカを初めて見た時、パンダによく似た鳥だと思った。神様は本当にいたずらものだ。パンダは上野、エトピリカはもっと近い大黒島にいるという。今年こそ2、3泊の旅になるだろうが、今から仲間を集めて、エトピリカを見る私設探鳥会を開きたいものだと思っている。（飯山記）

☆　3号目ともなると、幾分手際がよくなりましたが図、写真の配置等まだまだ不満です。ご迷惑でしょうが、もう1号お付き合い下さい。次号は円山の鳥、野鳥紳士録、コウノトリ等の予定です。（森記）